

モンゴルの児童書選書にかかわる調査報告書

2013 年 11 月

報告者：モンゴル児童文学翻訳者

津田 紀子

<はじめに>

2013 年 6 月に国際子ども図書館を訪問し、モンゴル児童書の所蔵状況を見せていただく機会を得た。2000 年以降に出版された比較的新しい本を中心に所蔵されていた。ただ、寄贈された本が中心とのことで、作家や作品にかたよりがあり、モンゴル児童文学をまんべんなく網羅できるよう補充する必要があると思われた。そのため、今回の選書リスト作成においては、(1) 子どもたちに長く読み継がれているモンゴル児童文学の名作、(2) 文学賞受賞作品、(3) 百科事典の類、(4) 児童文学の研究書を中心に選書した。

リストにあげた本は、作成の段階において筆者がモンゴルの書店や古本屋、または図書館にあることを確認したが、モンゴルの出版事情からあらかじめ以下のことをご理解いただきたい。

まずモンゴルは、人口わずか 286 万 8,000 人（外務省 HP より）と、とても小さな市場である。1 冊あたりの印刷部数はたいてい 300-1,000 程度で、再版もなかなか行われないため、すぐに入手できなくなってしまう。今回の選書において、基本的には書店や出版社で購入可能な比較的新しい本を中心に選書したが、すでに販売されなくなっている場合は、図書館で閲覧するか古本屋で購入するしかない。

またモンゴルでは、出版社と作家の間で、印税契約（もしくは買い取り契約）がかかわれることもあるが、金額が非常に安いそうである。そのため、誰でも知っているような有名な作家であっても、自費出版することがめずらしくない。そのような理由から、本リストでは、自費出版と商業出版の区別をしていない。

<文学賞>

モンゴルでの文学賞は作家同盟主催の「作家同盟賞（Монгол зохиолчдын эвлэлийн шагнал）」と「金の羽賞（Алтан өд）」のほか、国がおくる「ナツァグドルジ文学賞（Д. Нацагдоржийн нэрэмжит шагнал）」、そして文学に限らず功績のあった人におくられる「国家賞（Монгол улсын төрийн шагнал）」がある。児童文学賞や絵本賞といった、児童文学や絵本のみを対象にした賞は、コンクールの形で単発で行われることはあるものの、設けられていない。

作家同盟賞は、1964 年から続く歴史ある賞である。当初は 1 年に 3 作品が選ばれていたが、近年では 1 年に 10 作品ほど選ばれることもある。

金の羽賞は、2001 年からはじまった文学賞で、詩、歌詞、児童書、翻訳、批評、脚本、散文（短編）、散文（長編）8 部門にわかれており、その年に出た作品のなかから部門ごとに受賞者が選ばれる。

ナツァグドルジ文学賞は1966年の第一回から現在まで続く文学賞で、2～3年に1度、作家、批評家、詩人、翻訳家といった文学者に対して、基本的に1度に3人が授与される賞である。児童文学、一般文学といった部門にはわかれていない。

ただ、モンゴルには、現在40人あまりの児童文学作家がいるが、作家の人数が少ないことや一度に授与する人数が多くなってきた傾向があり、その多くがすでに何らかの賞を受賞している。そのため、近年ではあまり権威のあるものではなくなってきた面もある。

国家賞は、文学にかぎらず、さまざまな分野で功績のあった人に贈られる賞である。児童文学作品で受賞したのは、Ch.ルハムスレン (Ч. Лхамсүрэн) の「Хүрэн морь (焦げ茶の馬)」(リスト番 60) と D.ガルマー (Д. Гармаа) 「Хөгжөөнтэй туужууд (愉快なお話)」であり、また今でも子どもたちに親しまれている名作「Хорвоотой танилцсан түүх (ぼくが世界を知った歴史)」(すでに国際子ども図書館に所蔵)を書いた L.トゥデブ (Л. Түдэв) も受賞している。

そのほか、大手出版社の ADMON (АДМОН) が経営する本屋「INTERNOM (ИНТЕРНОМ)」は、2008年から毎年、年間ベスト10を発表している。これは、本屋での売り上げと読者アンケートに基づいて部門ごと(翻訳、モンゴル文学、自己啓発、歴史と社会、ミステリー、ビジネス経済、家族と健康、自然科学、参考書、児童書、辞典)にベスト10を発表する。

児童書部門は、アンデルセンのお話や赤ちゃん・幼児向けの「はじめて絵本」などが上位を占めており、またモンゴルの子どもたちに人気のあるマンガ(児童書部門に含まれている)も、上位にランクインしている。

<出版カタログとウェブサイト>

モンゴルには児童書専門出版社はないが、児童書に力を入れている出版社として、ADMONグループの Monsudar (Монсудар 1998年設立)、Munkhiin Useg (Мөнхийн Үсэг) グループの Bolor Sudar (Болор Судар 2001年設立)、Selengepress (Сэлэнгэпресс 2002年設立) などがあり、それぞれ自社の出版カタログとウェブサイトで情報を公開している。

Monsudar <http://www.monsudar.mn>

Bolor Sudar <http://www.bolorsudar-publishing.mn/main.php>

Selengepress <http://selengepress.mn>

とりわけ Monsudar は、イギリスの出版社 DK 社の出版する図鑑や児童書の翻訳、「はらぺこあおむし」(2013年にモンゴルではじめて出版)など世界の名作絵本の翻訳のほか、自社企画で赤ちゃん絵本や知育絵本、民話集等、児童書の良書を数多く出している。

また、以下のサイトでも児童書の情報が掲載されているので、参考までに記しておく。

http://www.taniinom.mn/books/cat_37

http://www.mongolnom.mn/product/list/category_id/38

<http://www.bookstore.mn/list/141>

<書店>

ウランバートルの大きな本屋は、市内中心部のノミンデパート5階と ADMON 出版社の経営する INTERNOM 書店、Munkhiin Useg 出版社の経営する AZ KHUR (A3 XYP) 書店である。また、大手デパートやスーパー内の一角に児童書の本棚を設けての販売も行われている。

古本屋は、モンゴル教育大学東側のセレベ川沿いにある。社会主義時代に出版された本等、書店では販売されていない本もあるが、当然ながら希望の本が必ずしも入手できるとは限らない。

<子どもの読書環境向上のための活動>

○教育・科学省の「読書計画」

2012 年 10 月からモンゴル政府による「読書計画 (Ном хөтөлбөр)」が実施されている。作家同盟の発行している「文学芸術新聞 (Утга зохиол урлаг)」によると、この「読書計画」の一環として児童図書 21 冊が推薦図書となった。これは、以下に述べる Read プロジェクトの児童書カタログ (2009 年) と 2011 年に出た教育・科学省省令における推薦図書をベースに選定された。推薦図書 21 冊と 2011 年の省令における推薦図書は、「文学芸術新聞」(2013 年第 7 号/2411 号/2 面)に掲載されている。

今回の選書リスト作成において、これらも参考資料のひとつとした。しかし、社会主義時代に出版され現在では入手が難しい本も多く、子どもの年齢と本の対象年齢が一致していないものもあるといった問題も見受けられる。

○国立児童図書館

ウランバートルには、中心部の文化会館 (Соёлын төв ордон) 内に国立の児童図書館がある。社会主義時代にあった児童図書館が、1990 年の民主化・市場経済化以降、国立中央図書館に一度編入され、その後 2003 年に文化会館内に設立されたものである。全蔵書数はおおよそ 10 万冊。蔵書内訳は、日本 1,200 冊、台湾 500 冊、英語 4,000 冊、ドイツ 4,000 冊、そのほかがロシアとモンゴルの本とのことである。

ウェブサイトは以下の通り。

国立児童図書館 (Хүүхдийн номын ордон)

<http://www.bpc.mn/>

また以下のウェブサイトでモンゴル人作家の書籍データが公開されている。

<http://www.bpc.mn/images/stories/1971-2011/71-11%20nomzui.pdf>

○世界銀行の援助による「Read (Rural Education and Development)」プロジェクト

2006年から2008年にかけて、世界銀行の援助で、全国のソム（村に相当する行政単位）の学校の1～5年生のすべてのクラスに学級文庫をつくるプロジェクトが実施された。このプロジェクトは、本に触れる機会の少ない地方の子どもたちが、多くの本に親しむことを目的としたプログラムで、全国393校、1～5年生の3,520学級が対象となった。首都ウランバートルと各県の県庁所在地の学校は対象外である。日本からは、志茂田景樹の「きたぎつね嵐」（KIBA BOOKS）とたにけいこの「サーくんと紙さんと11匹の旅」（グリーン購入ネットワーク鹿児島）が文庫の蔵書に入っている。作家の承認を得た作品はネット上のオンライン図書館に収録され、「きたぎつね嵐」モンゴル語版も以下のサイトで読むことができる。

<http://en.childrenslibrary.org>

このReadプロジェクトでは、学級文庫でそなえるべき本のなかから270冊を紹介する児童書カタログ（Хүүхдийн номын каталог）が2009年に出版された。

○移動図書館

モンゴルの児童文学作家であり、IBBYモンゴル支部代表のJ.ダシドンドグ（Ж. Дашдондог）は、1991年から移動図書館活動を行っている。1991年より22年にわたって活動を続け、2006年にIBBY朝日国際児童図書普及賞を受賞した。現在もモンゴル全国を精力的に回って活動している。

<モンゴル児童書出版の現状>

モンゴルは、1921年から1990年まで社会主義体制であったため、国の出版局が一括して出版物を制作し、児童書も国が管理して出版していた。社会主義体制のもとでテーマや内容にいろいろな制限はあったが、児童文学を手がける作家も多く、国民に親しまれる名作も数多く生まれた。

しかし、90年の民主化、市場経済化後、社会と経済の混乱の中で、本の出版が難しい状況となり、子どもたちに本が行き渡らなくなってしまった。

90年代の終わりから2000年初頃より民間の印刷所・出版社が設立され、少しずつ児童書が出版されるようになった。当初は印刷業務がメインであったが、現在では、海外の出版社から版權を購入したり、作家とも印税契約を結んで出版するなど出版編集業務も行うようになってきている。2013年現在は、子ども向けのさまざまなジャンルの作品が店頭に並ぶようになってきている。

<モンゴル児童書作品の傾向>

モンゴルの児童書の大きな特徴としては、韻文の作品の占める割合が高いことがあげられよう。モンゴル人は、古来より遊牧生活を送ってきたことから、物語は人びとのあいだで、覚えやすく語りやすい韻文で口伝えに伝えられて来た。現在でも、学校で詩を暗唱す

るほか、子どもを対象にした全国規模の詩の暗唱コンテストが開かれるなど、詩は人びとに身近である。

一方、散文作品はというと、短編は多数あるが、長編となると非常に少ない。とくに社会主義時代は、児童文学においても社会主義リアリズムの手法で書かれていたためか、現在においてもファンタジー作品はほとんど書かれていない。

絵本についても書店に並ぶ絵本の多くは、アンデルセンのお話やモンゴル民話を絵本化したものであり、創作絵本はまだこれからの分野である。しかし、2003年に ADMON 出版社が絵本コンクールを行い、グランプリをとった本が日本でも翻訳出版されているほか（「ひとりぼっちの白い子ラクダ」 Ts.ホンゴル、Sh.ガンボルド作、ネット武蔵野、2005）、長年、モンゴルの児童書のイラストを描き、2012年、IBBY honor list のイラストレータ部門を授与されたベテランの D. バトソーリ（Д. Батсуурь）、モンゴル人の絵本作家 B.ボロルマー（Б. Болормаа）や I.ガンバートル（И. Ганбаатар）は、モンゴル国内のみならず日本や海外でも絵本を出版するなど、優れた作品を生み出す力のある若者が活躍しており、今後が期待される。

マンガも、モンゴルではここ 10 年の間に出版されるようになった新しいジャンルである。モンゴルはそれまでマンガになじみがなく、2005年に出版された「チンギスハーン」がその先駆けといえよう。これは、韓国人とモンゴル人の共同作品であるが、モンゴルの子どもたちに広く受け入れられた人気漫画である（1～20 巻）。日本のマンガでは「スラムダンク」、「ドラゴンボール」、「ナルト」が出ている。最近では「Dinza!」などのマンガが人気で、本屋で夢中になって立ち読みする子どもたちの姿をみかける。これは数年前まではほとんど見かけることのなかった光景である。

<日本モンゴル両国における翻訳出版の実情>

モンゴルの児童書において、翻訳作品の占める割合は非常に高い。アストリッド・リンドグレーン「長くつしたのピッピ」、「屋根のうえのカールソン」、サン・テグジュペリ「星の王子さま」などたくさんの児童書が翻訳されている。2013年にはエリック・カールの「はらぺこあおむし」が翻訳出版された。

しかしながら、日本の児童書の翻訳はきわめて数が少ない。76年に松谷みよ子の「龍の子太郎」がロシア語から翻訳された（76年版はモンゴルにおいてはまず入手困難であるが、すでに国際児童図書館に所蔵されている）。「龍の子太郎」はモンゴルで長く読み継がれ、2012年に ADMON 社から再出版された。

そのほか松谷みよ子「ちいさいモモちゃん」（リスト番号 41）、那須田稔「空とぶオートバイ」（リスト番号 42）、宇田祥子「ムルンとサルタイ」（国際子ども図書館所蔵）、志茂田景樹「きたぎつね嵐」、たにけいこ「サーくんと紙さんと 11 匹の旅」などの翻訳が出ているが、数える程度である。

一方、モンゴル人児童文学作家の作品の日本での出版状況はというと、近年、J.ダシド

ンドグの「しんせつなおとなりさん」(フレーベル館『キンダーおはなしえほん』41
(8)、2007.11)、「みどりの馬」(てらいんく、2004)、B.ボロルマーとI.ガンバートルの
「おかあさんとわるいキツネ」(福音館書店、2011)、「ゴナンとかいぶつ」(偕成社、
2013)、「バートルのころのはな」(小学館、2011)などが、紹介されている(B.ボロル
マーとI.ガンバートルの上記3冊は日本で創作した作品で、モンゴルでは出版されていな
い)。

日本とモンゴルの交流が多方面で盛んとなっている現在、児童文学においても、より活
発な交流が期待される。

以上が、本リスト作成における報告である。